様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２９ 年　 ８ 月 １７ 日現在

機関番号：１３９０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2016
課題番号：２６３７０５３３

研究課題名（和文）近世における漢文訓読と日本語意識の形成に関する研究

研究課題名（英文）A Study on the KanbunKundoku (Japanese (Japanese Readings of Chinese Texts) and the Formation of Japanese Language Consciousness in the Early Modern Period

研究代表者
齋藤　文俊（SAITO, Fumitoshi）

名古屋大学・文学研究科・教授

研究者番号：９０２０５６７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、近世という、日本語への関心が高まり、またその一方で、漢文訓読が大きく変化した時期において、漢文という外国語を翻訳することによって生じた日本語文章（漢文訓読文）の語法を精査し、さらに、それに関わった学者たちの言説を整理していくことにより、それらの中に表れた「日本語意識」の形成過程を明らかにしていくことを目指したものである。
　本研究において、漢文訓読語法が、「威厳のある文体」および「誰にでも理解できる平易な文体」の中でどのように受け継がれていったのか、また変化していったのかを具体的に示すことにより、近世から近代初期にかけての日本語意識について解明してきた。

研究成果の概要（英文）：This study closely examines the wording of Japanese sentences (kanbun readings) that arose from the translation of foreign languages, such as kanbun, during the early modern period, which was when interest in the Japanese language increased and the reading of kanbun considerably changed. Additionally, by organizing the discourse of scholars involved in these readings, this study clarifies the formation process of Japanese language consciousness that appeared in them.
　Over a period of three years, I identified Japanese language consciousness from the early modern period to the early period of the modern era by concretely showing how kanbun readings were inherited through a process of alteration from a dignified style to a simplified style that everyone could read. I also examine the manner in which kanbun readings changed.

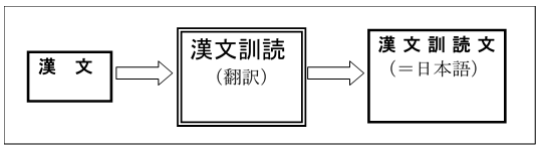
研究分野：人文学

キーワード：漢文訓読　日本語意識　日本語史　翻訳　近世　江戸時代

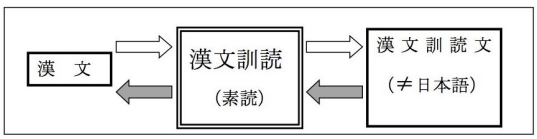
１．研究開始当初の背景

近世は、国学が興るとともに、日本語への関心が高まって様々な研究成果が出された時期である。その近世において、「漢文訓読」も大きく変化した。

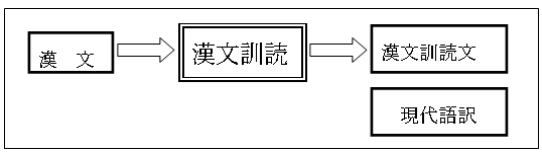
近世初期までの漢文訓読は、外国語である漢文に、返点・カナなどの記号を付加することで日本語として解釈する一種の翻訳作業であった。



しかし、近世において、漢文訓読が補読語の減少・音読の多用などによって簡略化していくことになり、また、素読が広く行われることで、漢文訓読は形式化され、なるべく原漢文に戻りやすいような訓読法が出現するようになる。その最たるものが、佐藤一斎（1772-1859）の一斎点で、その不自然な語法については近代においても批判するものが多い。つまり、漢文訓読文は、素読を通してそのリズムを「型」として身につけるものであり、原漢文の意味は素読とは別に講義されることになる。



ただ、その一種独特の文体が「漢文訓読体」として近代以降も好まれて使われていくことになるが、現代においては、漢文訓読文だけでは文意を理解することは困難であり、現行の漢文のテキストの多くでは、原漢文・漢文訓読文・現代語訳がセットで示されている。このような傾向はすでに近世においても見られ、広く読まれていた渓百年の『経典余師』（天明元〈1781〉年刊）においても、原漢文・漢文訓読文とは別に、漢文の解釈付されているのである。



本研究では、このような近世における漢文訓読の変化、つまり、翻訳としての漢文訓読から、「素読」のための漢文訓読へと変化していく過程において、当時の学者たちが、外国語の漢文を訓読・解釈する際に、日本語をどのように意識していたのか、そしてどのような日本語が使用されたのかを明らかにするものである。

２．研究の目的

本研究は、近世という、日本語への関心が高まり、またその一方で、漢文訓読が大きく変化した時期において、漢文という外国語を翻訳することによって生じた日本語文章（漢文訓読文）の語法、および漢文を解釈していく上で使用された語法を精査し、それに関わった学者たちの言説を整理していくことにより、それらの中に表れた「日本語意識」の形成過程を明らかにしていくことを目指したものである。

３．研究の方法

本研究は、近世という、漢文訓読が大きく変化した時期において、漢文という外国語を翻訳することによって生じた日本語文章（漢文訓読文）の語法を精査するとともに、その翻訳作業によって意識化された日本語意識の形成過程を明らかにしていくものである。

そのため、26 年度から 28 年度にかけて、
①近世漢文資料に用いられた語法の幅広い収集・調査
②調査結果を多方面の研究に役立てていくために、コンピュータを用いたデータベース作成の基礎調査
③国内の近世日本語研究者また漢文訓読関係研究者との情報交換と共同研究への準備
以上の①～③の作業を行った。
なお、3 年間の研究期間において、主として調査したのは下記の資料である。

- 『経典余師』
  近世後期から近代にかけて広く読まれた『経典余師』の注釈部分を調査した。
- 宇野明霞の三平点
  宇野明霞（1698-1745）の訓読法である「三平点」は、漢文を口語訳することを目指し、そのため近世において「俗」であるという評価を受けた。その訓読語法を調査した。
- 漢語文法資料
  漢語文法における語の分類説が近世の国語研究に与えた影響については知られているが、逆に、皆川淇園（1734-1807）の『助字詳解』（文化 8〈1811〉序）のように、漢文の助字を国語の「テニヲハ」と比較しているものがある。これらについて調査した。
- 白話小説の翻訳本および唐話辞書
  下記「研究成果」(1)で詳述。
- 近代邦訳聖書
  下記「研究成果」(2)および(3)で詳述。

４．研究成果

(1)近世における日本語意識

近世（江戸時代）における日本語意識については、単著論文「江戸時代における白話小説の翻訳と可能表現　―「雅」「俗」二つの漢字文化―」（『近代語研究』第 18 集、武蔵野書院、2015、125-140）において、江戸時代の漢字文化に、漢文訓読を中心とする「雅」の世界と、唐話や白話小説という「俗」の世界が両立していたことを論じ、本研究のテーマである「日本語意識の形成」を、「雅」「俗」両面から整理していく可能性を示した。その

概要を以下に示す。

江戸時代における漢字文化は、まず古来受け継がれてきた漢文訓読を中心とした世界が一方にあり、その世界の中で、漢文訓読語法が展開し、近代語にも大きな影響を与えている。その漢字文化を「雅」の世界とすると、その一方で、同じ江戸時代の漢字文化でも、唐話や白話小説という「俗」の世界の中で、漢文訓読とはまた異なる語彙や語法が形成されている。その「雅」「俗」二つの世界における語法の違いを対照させるため、本論文では、可能（不可能）を表す語法に注目して考察した。

まず、唐話辞書『唐音雅俗語類』における可能表現形式を調査し、同書にみられた「不能」「（不）得」に対する訳語を「雅語類」「俗語類」に分けて整理した。次に、江戸時代に多く読まれた「水滸伝」を調査することで、実際の白話小説翻訳本における可能表現形式についての考察を行った。

江戸時代における『水滸伝』の受容としては、まず、『唐音雅俗語類』を著した岡島冠山付訓による和刻本『忠義水滸伝』（享保一三年刊）という漢文訓読形式のものがあり、そして、その岡島冠山が訳したとされる『通俗忠義水滸伝』（宝暦七年から刊）、さらには、曲亭馬琴が訳した（ただし初編のみ）『新編水滸画伝』（文化二年から刊、葛飾北斎画）などが出されており、『新編水滸画伝』は「訳水滸弁」に、読者対象を「婦女童蒙」とすると書かれており、そのため表記も漢字平仮名交じり文、総ルビで書かれている。本論文では、その『通俗忠義水滸伝』および『新編水滸画伝』に使用された可能（不可能）表現、特に「（不）能」「得」を用いた、

〈・・・連体形＋コト＋能ハズ〉
〈・・・連体形＋コト＋ヲ得〉
〈・・・連用形＋得〉

という三形式を調査した。その結果、和刻本『忠義水滸伝』では、荻生徂徠がいうところの「俗」の可能表現である〈・・・連用形＋得ズ〉であったものが、『通俗忠義水滸伝』では、「雅」の〈・・・連体形＋コト＋能ハズ〉という形が用いられ、一方、『新編水滸画伝』ではその「能ハズ」ではなく、「俗」の〈・・・連用形＋得ず〉および馬琴の特徴とされる「かなはず」が用いられていたのである。

このような江戸時代の漢字文化の「雅」と「俗」の対応が、他のどのような語法に見られるのか、そしてまたその対応が明治以降にどのように引き継がれていくのかについてが今後の課題となった。

(2)近代における日本語意識

日本語学会におけるシンポジウム「明治初期における学術日本語を記す文体」（日本語学会 70 周年記念シンポジウム“学術日本語”の歴史と未来―大学教育国際化時代を迎えて―」、日本語学会 2014 年度春季大会、2014 年 5 月 17 日、早稲田大学国際会議場井深大ホール）において、下記のような発表を行った。

すなわち、明治初期において学術日本語を記す際にどのような文体が用いられたのか、その選択問題について、実際に記述（翻訳）する側の意見がわかるものとしては、聖書の翻訳がある。近代初期の聖書翻訳においては、中国ですでに翻訳されていた「漢訳聖書」（ブリッジマン・カルバートソン訳 1859）の存在が大きかった。翻訳者の一人である J.C.ヘボン（1815-1911）はその手紙の中で、日本の知識人たちの間には、漢文を理解する力があることを認めつつも、漢文を理解できない「国民大衆」が多いことを指摘している。そのため、ヘボンら外国人宣教師達は、漢訳聖書、則ち漢文からなるべく離れた文体にすることを目指した。その結果誕生したのが、翻訳委員社中訳の『新約全書』（明治 13〈1880〉年刊）であり、ヘボンはその文体について、あまり多く漢文がまじっていないで、容易に民衆に読まれ、理解されるものであると評価している。

その際、硬い漢文風の訳文を軟らかくしようとした工夫としては、まずルビの使用が指摘されている。用語の面では、「ルビ」を使用することにより、漢文らしさを残しつつも、意味の分かりやすさも目指していったわけであるが、本発表では、その聖書の用語をどのような文体で記述していたのかを「可能表現」、その中でも最も漢文らしい表現としての「アタハズ（不能）」に注目して整理した。その結果、明治期の聖書翻訳における可能表現は、漢訳聖書で「不能」が使用される場合には、「能はず」が中心になっていることからもわかるように、やはり漢文訓読体が基調になっている。しかしその一方で、ヘボン訳における、和語を中心とした訳語や、「カナハズ」などの訳語にみられるように、より民衆に理解されるような表現を目指した試みも行われていたのである。

(3)聖書翻訳と日本語意識

上記のように、近世から近代にかけての日本語意識を解明するためには、聖書を資料として用いることが有効であることが明らかになった。そこで、以下のような口頭発表および論文において、近代邦訳聖書における漢文訓読語法の使用状況についての調査を行った。

①「明治初期における聖書の翻訳と漢文訓読語法　―「スナハチ」を例に―」（第 5 回外国資料研究会、2016 年 1 月 23 日、愛知県立大学）

本発表で得られた成果を、単著論文「明治初期における聖書の翻訳と漢文訓読語法　―「スナハチ」を例に―」（『文字文化財研究所紀要』第 3 号、2017、98-110）として公刊。

②「明治初期における聖書の翻訳と漢文訓読語法　―「欲ス」を例に―」（第 7 回外国資

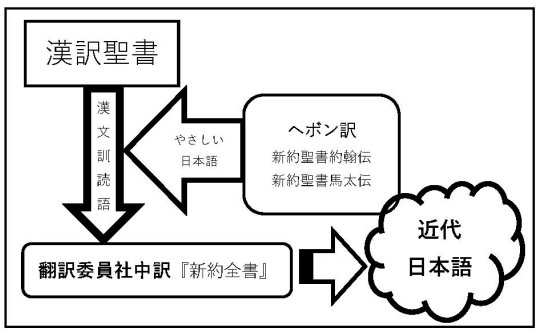
料研究会、2017 年 1 月 13 日、愛知県立大学サテライトキャンパス）
その内容をまとめて示すと下記のようになる。

上述のように、明治初期の日本において聖書を翻訳する際には、既に中国において翻訳されていた「漢訳聖書」の存在が大きかった。当然日本においても、その漢訳聖書を訓読すれば、日本語訳の聖書が出来上がるわけである。しかも漢文訓読体となるため、聖書としての威厳も出る。このような威厳を重視し漢文訓読体を支持する立場（それは主として日本人補佐者の意見であった）に対し、J.C.ヘボンや S.R.ブラウンら外国人宣教師たちは、日本人の誰にでも読める文体で訳すべきだと主張したのである。

そこで、①では、漢訳聖書で用いられた「則」「乃」「即」が、ヘボン訳の聖書、また翻訳委員社中訳の聖書の中でどのように用いられているのかを調査し、ヘボン訳、社中訳ともに、該当部分に「すなはち」が使用される例が少なくなっていること、特に「民衆に理解される」訳文を目指したヘボン訳の使用数が少ないこと、そして、社中訳はヘボン訳に比べれば多くなっているものの、「レバ則」と一般的に称されている漢文訓読独特の表現形式はほとんどみられなくなっていることを示した。

②では、やはり漢文訓読に特徴的な語法である「欲」に注目し調査を行った。従来、「欲」には、「願望」の意味だけではなく、「将然」の用法があり、後者の「欲」を訓読する際には、古くは「ムトス」などと訓まれていたものが、江戸時代から前者も後者も「ホツス」と訓まれるようになったとされている。

そこで、漢訳聖書で用いられた「欲」が、その訓点本では「ント欲ス」と訓まれていたことを確認した上で、J.C.ヘボン訳の聖書、また翻訳委員社中訳の聖書の中でどのように用いられているのかを調査した。その結果、ヘボン訳、社中訳ともに、「ント欲ス」のような漢文訓読独特の表現形式はほとんどみられなくなっていることを示した。



このような、①②でとりあげたような漢文訓読独特の語法が、「誰にでも理解できる平易な文体」を目指した聖書の翻訳においてどのように受け継がれていったのか、また変化していったのかを示すことにより、当時の日本語意識についても解明していくことができると考えられる。（上図）

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 2 件）

①齋藤文俊、明治初期における聖書の翻訳と漢文訓読語法　――「スナハチ」を例に――、文字文化財研究所紀要、査読無、第 3 号、2017、98-110

②齋藤文俊、江戸時代における白話小説の翻訳と可能表現　――「雅」「俗」二つの漢字文化――、近代語研究（武蔵野書院）、査読無、第 18 集、2015、125-140

〔学会発表〕（計 4 件）

①齋藤文俊、明治初期における聖書の翻訳と漢文訓読語法　――「欲ス」を例に――、第 7 回外国資料研究会、2017 年 1 月 13 日、愛知県立大学サテライトキャンパス（愛知県・名古屋市）

②齋藤文俊、明治初期における聖書の翻訳と漢文訓読語法　――「スナハチ」を例に――、第 5 回外国資料研究会、2016 年 1 月 23 日、愛知県立大学（愛知県・長久手市）

③齋藤文俊、漢文訓読と日本文化　（Kanbun kundoku dan Budaya Jepang）、Seminar on "Language, literature and teaching in the contemporary perspectives"、2014 年 10 月 20 日、スラバヤ大学、スラバヤ（インドネシア共和国）

④齋藤文俊、明治初期における学術日本語を記す文体、日本語学会 70 周年記念シンポジウム“学術日本語”の歴史と未来―大学教育国際化時代を迎えて―」（日本語学会 2014 年度春季大会）、2014 年 5 月 17 日、早稲田大学国際会議場井深大ホール（東京都・新宿区）

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：

番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

６．研究組織
(1)研究代表者
齋藤　文俊（SAITO, Fumitoshi）
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号： 90205675

(2)研究分担者
(　　)
研究者番号：

(3)連携研究者
(　　)
研究者番号：

(4)研究協力者
(　　)
研究者番号：